

15-13 価値は商品生産とともに消滅する

②-[77]P249

(カウツキーあてのエンゲルスの手紙 1884. 9. 20)

「現在の価値は商品生産の価値だが、商品生産が廃止されれば価値もまた『変る』、すなわち、価値自体は残って形態だけがいれかわる、と君はいう。だが実際は、経済的価値は商品生産に属する範疇であって、商品生産とともに消滅する(『反デューリング論』、252-62ページ〔全集、20巻、310-22ページ〕を見よ)のであり、これは、それが商品生産以前には存在しなかったのと同様である。生産物にたいする労働の関係は、商品生産以前には、またそれ以後にはもはや、価値の形態では表現されないのだ。

* [1884年8月と9月に、カール・カウツキーは『ノイエ・ツァイト』で彼の批判「ロートベルトゥスの『資本論』」を公表した。これにたいして、カール・アオグスト・シュラムが、『ノイエ・ツァイト』での発表のために反論をカウツキーに送ってきた。その発表に先だって、カウツキーは「回答」を書き、これをシュラムの原稿といっしょにエンゲルスに送り、検討を求めた。]

※商品・市場についての青山の考え

社会主義社会でも貿易は行われ、個人が必要とする財・サービスも商品として社会主義社会に残る。その意味で、市場(いちば)は残る。また、合理的な生産のためには、それぞれの財・サービスの生産のために投入された労働量を測る必要も残る。ただし、商品(財・サービス)の生産は、それぞれの商品の社会的必要量にしたがって決められ、それらの商品の価格は社会的に統制されて設定される。